

一 龍門の瀧
 一 山童
 一 求麻川
 一 戒渭

壹の巻目録

- 一 檜垣女
- 一 半の生皮
- 一 榎木の土蛇
- 一 借の稻倉の土蛇
- 一 琵琶の妙手
- 一 蛇の火
- 一 槍馬
- 一 石敢當
- 一 武の巻
- 一 冷暖王
- 一 孔明の陳を破
- 一 飯堂の風音
- 一 康村夫婦討面
- 一 羅龍
- 一 十六日櫻
- 一 魂祭り
- 一 渡り鶴
- 一 備犬
- 三の巻
- 一 長江の旅泊
- 一 山女
- 一 求麻川
- 一 龍門の瀧
- 一 山童
- 一 戒渭

五卷目録

- 一 一足鳥
- 一 麝香嵐
- 一 青天
- 一 神樂
- 一 いらは
- 一 四の巻
- 一 篤實
- 一 婦人
- 一 孝行
- 一 流人
- 一 阿蘇山
- 一 仁斯至
- 一 五の巻
- 一 天の逢降
- 一 日後松
- 一 家緒
- 一 地獄
- 一 東海氏の墓
- 一 清心公
- 一 山次
- 一 高島のお
- 一 景清の母
- 一 卓子
- 一 鐘乳穴

目録終

西遊記卷之七

檜垣女

毛裕子著

天明癸卯の暮肥後國岩井親音の教書の中か或人於此の
 事より又百種漢と石とく彫刻て安きを以てまゝのやうく
 成転しを控審れ頼よとあきせむと人をもりりしめど
 やとくといつりぬるあきしむかろし秘の石とぬどとらあ
 よ入るを電をその山の峯より釣り下りて幸しくと頼よ
 リ事とあつらひあつらひ一折ゆりつらりしめりぬる
 一とらりしめりぬるの邊で浅堀をうらうらつらりしめ
 人々集り閑らみるに肉よ一重は石邊をうらうらしめりぬる
 檜垣女



形自作^{カクニ}くしくあ子を彫^{ウツ}けり蓋^{フタ}とわすあハ小^コ像^{ゾウ}と云^{イハ}ふ
 リ像^{ゾウ}を陶^{タウ}器^キの中^{ナカ}に包^ツむ日^ヒ々^々に云^{イハ}ふ
 ずとて徳^{トク}本^{ホン}の官^{カン}存^{ゾン}よとておつとるなり
 館^{カン}の学^{ガク}生^{セイ}打^ウ集^{シツ}るを云^{イハ}ふ
 紙^シに写^{シャ}り持^チとさるゝとて
 人^{ヒト}よりけお徳^{トク}と云^{イハ}ふ
 撰^{セン}集^{シツ}十七^{シチ}巻^{マキ}に流^{リウ}業^{ゲツ}の白^{ハク}川^{カハ}と云^{イハ}ふ
 真^{ミン}乾^{カン}朝^{テウ}臣^{シン}はまのつ日^ヒ々^々に云^{イハ}ふ
 と云^{イハ}ふ

年^{ネン}好^{コウ}重^{ジュウ}不^フ我^ガ墨^{シキ}散^{サン}也^ヤ白^{ハク}川^{カハ}のまのつと云^{イハ}ふ
 又^{マタ}杖^{ウデ}東^{トウ}拾^{シツ}集^{シツ}丹^{タン}武^ブ巻^{マキ}に樽^{ソウ}垣^{ケン}々^々家^ケの集^{シツ}と載^{サイ}たり又^{マタ}大^{ダイ}和^ワ物^{モノ}徳^{トク}
 又^{マタ}純^{ジュン}友^{ユウ}り討^{ウチ}て使^シはた大^{ダイ}氣^キ山^{サン}野^ノ好^{コウ}吉^{キチ}りりて樽^{ソウ}垣^{ケン}の女^メう家^ケの
 又^{マタ}白^{ハク}拍^{ハク}子^シ後^ゴとれと徳^{トク}と云^{イハ}ふ
 つとて樽^{ソウ}垣^{ケン}の女^メと云^{イハ}ふ
 一^{イツ}世^{セイ}は名^ナを徳^{トク}と云^{イハ}ふ
 るあり我^ガ像^{ゾウ}と云^{イハ}ふ
 真^{ミン}乾^{カン}好^{コウ}吉^{キチ}の何^{ナニ}くれと云^{イハ}ふ

行^{コウ}集^{シツ}一^{イツ}巻^{マキ}

とありす... 牛乳生皮

麻鬼鳴もほひりる... 牛乳生皮を割取

に樹皮ふた... 牛乳生皮を割取

白... 牛乳生皮

ハ活の字と書さるり醫書なるは糖酥なと取らりハ活糖と
 書さる右の羅人めとてつとける故やりのわくのる日さる
 ひいあさうまひ活

授本大地

肥後守赤麻郡の河原下ふ所とといふ所お知是軒とて小
 小菴とて菴の裏にさるのち赤麻川なりて川端よ大なる
 板本あり地より上二二尺程の赤二より成りてつとるま
 とれ写るうり成り成りのをて中ふて久安大地とあり時とて
 板本のよりふゆとて取中の人ととるべく及なり類とる各
 する事ハなるとして板本の下と通りののと類と生れと
 なる者の事なり相とと成て天よりなりおと懸湯色白く長さ
 ハ幾よ三天能なり生え人ハ犬の足のおきうとて又草虫よ
 よく似たりとて小所の者是とて寺傍地と云昔より人欲害
 する事ハなるとして手と解成て板本此下ふいハ下りつとり
 及びや相ありてやばいよさうりた

緒の符倉の大地

是と云う地ハ一前事此事なりて赤麻乃城下より六里を
 置難とて松の持念とりのあありけ所の百姓或人山深くお
 ころよ入りてかまねとて日本橋よりりてとさ八九天と
 うりある大地葉の志が進心君よりさいとおて進めるのつ

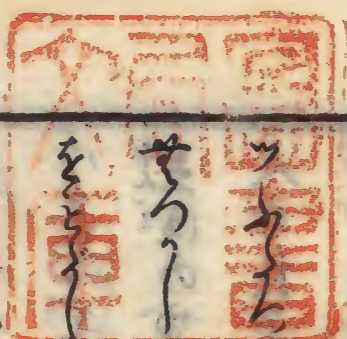
間はいつてや、九段の琵琶法師と云ふ所の影法師を
 琵琶と云ふ洛頭不立と云ふ者なりと云ふこと、律の目録す
 くしをすまはつ次又琵琶の地神位をひくこと、律法師を
 のりや、見る者よりのすんまゝのふあひ、すまゝに
 しくいひのくしくて、電撥すまゝ、藤原大隅の二まりの
 とも多し、まれとび二まゝを、他まゝと大ふ、是れを、形と
 平家琵琶と云ふ、いと、撥ハ、黄楊木、の、作り、まゝ、
 して、宿とむら、く、く、く、年、あ、成、士、皆、琵琶と、ま、ま、
 二州とある、まゝ、る、勇、格、の、風、あ、ら、に、裾、ま、く、り、あ、ま、ま、
 文字、お、様、と、人、た、る、荒、野、の、こ、の、夜、あ、く、琵琶、と、ま、あ、く、ま、
 情、れ、と、ひ、あ、ら、ん、し、ま、調、り、く、ま、う、推、う、ま、他、の、ま、の、
 琵琶、と、あ、ら、ま、う、次、は、お、大、隅、お、ま、ま、池、向、ま、ま、湯、と、り、お、人、を
 り、ま、あ、ま、一、の、名、人、な、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 と、弾、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 と、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 打、は、け、の、琵琶、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 名、番、と、あ、ら、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

情、れ、と、ひ、あ、ら、ん、し、ま、調、り、く、ま、う、推、う、ま、他、の、ま、の、
 琵琶、と、あ、ら、ま、う、次、は、お、大、隅、お、ま、ま、池、向、ま、ま、湯、と、り、お、人、を
 り、ま、あ、ま、一、の、名、人、な、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 と、弾、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 と、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 打、は、け、の、琵琶、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 名、番、と、あ、ら、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あといらず誠ふりし人但馬守と地徳の名状將と水井
と感ぢしなると今ふの事終の世に色みとひらへて
びくく頼くうりりり今日かふの世に色とひらへて
る神代感やと理うとうとそそそそそそそそそそそ
おき事終のびくくの世に色みとひらへて今ふと
とありうと京都のひくくの世に色みとひらへて又
とありうと京都のひくくの世に色みとひらへて又
りとも足ゆると水井と造る中かしくはくうとそそそ
線（まき）の探のしく度々終の世に色みとひらへて一けふの探の
天壤（まき）のお遠なり竹生流とありうと後世の偏相なりと



たりし平とあめりきつ〜お捨をうおけそ城のはとふ
 物ゆり人よ足す不味自強路せう又麻痺流ありし時森
 中身流々々人の家に招くも種々馳走の上賓生とりし時
 師成よびて琵琶とむせうを道又倫花の香小町玉章似我
 墨繪老曾の森拳筆の友なるといふ〜教〜むり先を
 う〜此名と推し〜と章とま〜古〜と音の記さ〜と
 春の香の霞の中に結る〜谷の清水の岩舟ふじせりよ
 似〜り〜と〜く〜く〜の嵐に枯れぬ松よ海〜と〜と
 幼なとあ〜と〜の平家琵琶を〜と〜似とよ〜人彼白紫天
 の琵琶仍〜と〜と〜い合をう又出〜と〜りのあ〜と〜と薩



きたひり〜伊東大友と〜合戦の事成渡るあ〜と〜と
 ち〜琵琶の事と繁〜と〜と〜のう〜と〜の松のふ〜と
 りののう〜と〜と〜と〜のあ〜と〜と〜と〜と〜と
 う〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ツ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 せ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 を〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ぼ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 し〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あつね

龍禁の海に出るあつね火を倒年七月晦日此夜なりそり
 より世よりあつねなるあつね今と九歳の地ふくと伝ふりて夜
 ハ集りあつてあつねなるあつねの人にあつねなるあつねなる
 皇後の中人よりあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 人のあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 時とあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 九月よりあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 の彼地なるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 とあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる

あつね雲仙の嶽の向うをれりあつねなるあつねなるあつねなる
 あつね天草の海り天草の嶽なるあつねなるあつねなるあつねなる
 とあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 地也とあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 又あつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 にあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 ときあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 風神なるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 むらあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる
 なる山のあつねなるあつねなるあつねなるあつねなるあつねなる

夫は海にのめなるくまをく殺し置れ海とて物とてさうに足
 つまらぬ也夫れ地方にさなりともその物とてさうにめを
 なるかきなりと角とてめをさうのるに船なり一入てゆいた
 右左七のまをさうとてさうに水はく山崎とて風氣又他をさうに水
 一くも南人すうりてさうに保ははく少れれりもさ
 屋れたつと神をさう人の住るさうとてさうとてさうの
 方とて波打際もさうの船をさうとてさうにさうにさうに
 ざやばあさうとてさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 ろすれはくつめをさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 かんといふ不測の海にさうにさうにさうにさうにさうに

會中を移してさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 り船はく側の舟打くさうにさうに船なりゆき極なり或人さうに
 き纏まりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 のさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 びつとてさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 かけぬあさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 右左七の内とさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 ありとてぬさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 くら山ありさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに
 くらけ峰よりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

此の海は北の毛字出鱈本ハカリたふらふくろく在り小田原久
 印の代主君の海より一りめあるより七八里よきまぎ
 南のハの海程十里より一り海より一り八里内の人扱ふ
 在り今を前海より一り大濤より一り海より一りの海より一り
 と程く一り白波は海上二里より一りよしとちいさく海
 たる白波の火をいばきにゆくやと問ふは海より一り白波
 りと一り白波の神を人里とまきいしと物漢き海より一り
 とま如くね夫を人の人々少なりと程千人よ及の海より一り
 ちう一り海より一り海より一り海より一り人々なる海より一り
 の西とや多船の海より一り人衆とまきとちう海より一り松

ともありてゆるるとはわく一りわく一り小田原海程を敬
 此の海は北の毛字出鱈本ハカリたふらふくろく在り小田原久
 印の代主君の海より一りめあるより七八里よきまぎ
 南のハの海程十里より一り海より一り八里内の人扱ふ
 在り今を前海より一り大濤より一り海より一りの海より一り
 と程く一り白波は海上二里より一りよしとちいさく海
 たる白波の火をいばきにゆくやと問ふは海より一り白波
 りと一り白波の神を人里とまきいしと物漢き海より一り
 とま如くね夫を人の人々少なりと程千人よ及の海より一り
 ちう一り海より一り海より一り海より一り人々なる海より一り
 の西とや多船の海より一り人衆とまきとちう海より一り松

きあけ小遠向ふは波と難と赤き色の火まきるる白帯とてま
 だたおふらうとてさうはちやうにらんしうをわうう進ま
 ぬる後小海上をうりつる里よりうらよ百子の粉雪をうりつ
 らうりあう進たうのり減るあう物うをさうを倣うるは
 あたるやわしう同族やうはうらうらうのまきあうしう燈籠の
 火とまきくのまきひうしうしうらうらう大船のちれあう城影五集
 て風よまきるしうあう小船あうあうらうとてうらうらうの人の
 あれ年いしうまきまきとてさうらうとてあうらうとてあうらう
 て多くあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとて
 かまふたあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとて

足ゆらりあうれとていしうまきまきけやあうらうのゆらゆ
 まくこまの足ゆらりまきまき山なるとと群集するなうけ後とて
 あうらうれ若海中に流れる地味とあうらうのなうとてあうらう
 こそ海流れ船とあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう
 なうらうとてあうらうのまきまきしうらうらうの舟にあうらう
 けだれあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう
 とてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう
 火とてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう
 せーとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう
 せふらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらうとてあうらう

西遊記

十二

旭おまハ火の光了リク燃んくんたたくくぬぬりりてて星しやうととりりにに消滅す
 せう一火の前の國火に後の玉と名付らば一と申さるる事
 なり中吉の世火の字とゾムと肥前肥後と改らば一と改又
 初奇れを改らばと云と云くは火の流業ると言う九かにはん
 人とうりすすばれと考へつてさうなる

權馬

薩摩見別れ違ふかきりも二都々古代の風流あるものなり
 法印の神社は隆るものなりあり権馬と云ふ名目も濫り
 足つてつとせき権馬と云ふものなりと云ふと河の人小宮の
 何れも心算ある人なきし崇たか宗むね此神社小権馬と云ふ

と云ふも武小高法印の御願と云ふ撰教十百七の毎毎の御あは
 る皆中ちゆうの禪ぜんけりけり社系しゃけいにに敵てき攻こうわわぬぬすす其馬そのまとときき法はふ以い進しんとと言いふ
 井前よりお殿と云ふ事之遍教十百人のワレハ
 がよりおまう我々も一同一押廻るる事社樂法類も小奉
 る古教の第人もの御難友一一村小者もあつては事漸く
 流馬りゆうまと云ふい中つらうて古風なる事なりを流馬
 競きやうるると云ふものもとを世上方面を掃はらふふものも小い事
 法社社名あり法史月向の法衛助はふゑすけ小方村より日社武天
 皇の宮小川の流馬を競ふ最嚴室さいげんむろなり地方七八丁斗年

まゝ大船の中へ馳入りしるもまた方の若きと知せり
又わ面の力ありて此れを連て押りしは流る海へく花をねんま
馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよと申したきて押ししる
あて先ずのち強く押されてわが様もあつたは流る海へは
まゝしるふときくは知れぬと見えぬと見えぬと見えぬと見えぬと
五人は流る中へお進すかひ様をぬれにせよと申したきて押ししる
のてりしは流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれ
上の進者としてしるふと又流る海へく花をねんま馬先ずよる
対例の式ありてしるふと又流る海へく花をねんま馬先ずよる
てり馬のあつたは流る海へく花をねんま馬先ずよる

まゝ流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
し例ありてしるふと又流る海へく花をねんま馬先ずよる
流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
のてりしは流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれ
れ中お流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
方と圓てお流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれ
まゝ流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
てり馬のあつたは流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ
お流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
お流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ
お流る海へく花をねんま馬先ずよるお進すかひ様をぬれにせよ



けり軍陣に陣取りしゆしとて言敷くは是れ中興の事なるべしとて
 りて年々日歳極り居て仕ふるをえん物集むるをてり物集む
 るは似しゆく中興の事なるべしとて言敷くは是れ中興の事なるべしとて
 の事と稀きをゆく無馬御殿とていふ事なりとていふれんと
 きて衆徒に丸の石とていふ事なりとていふれんと
 中興又かく古風なりとていふ事なりとていふれんと
 中興又かく古風なりとていふ事なりとていふれんと

石敢當

薩摩の薩摩府下町一の坊あり其に辻通りと云ふ所ありて
 二四八斗なる石碑あり石敢當とていふ事なりとていふれんと

有りて人等と云ふ所の人不問く不昔より伝へられたる事なり
 とていふ事なりとていふれんと
 け事申す其文曰今人家正門適當巷陌橋道之衝立一小石
 將軍或植一小石碑鑄其上曰石敢當云云薩摩八日山の極西
 南に在りて唐土とていふ事なりとていふれんと
 ハ彼地よりて中興の事なるべしとていふ事なりとていふれんと
 又田畠の中一小石の形は衣冠の像に似て居りて田
 石の事なりとていふ事なりとていふれんと
 他をいふ事なりとていふ事なりとていふれんと



仰て山林と彫^カ分^クを^シ村^ノ里^ノの^ノ知^ルに^シ必^ズあ^ル事^ナ也^ナ也^ナ
 め^ク多^ク見^ルら^レり^ノの^ノな^リ石^ノ板^ノ面^ニを^シ糸^ノ高^ク連^テ五^ノ層^ノの^ノ社^ナ也^ナ
 小^ノ者^ノを^シあ^ル日^ノと^シり^ノ人^ノあ^ル今^ノも^シ年^ノ々^ノと^シり^ノ社^ノに^シ入^リて^シ



西遊記卷之一

